

## 一葉文学に見る甲州方言

末 利 光

樋口一葉は明治五年（一八七二）に東京で生まれ、明治二十九年（一八九六）わずか二十四歳の若さでこの世を去った。

ことに吉原に近い下谷したや竜泉寺町から本郷丸山福山町に居を移してからの十四カ月は「奇跡の十四カ月」といわれるように、一葉は次々に名作を発表している。『たけくらべ』『にぎりえ』『十三夜』『この子』などがそれである。

表現学を担当する私は、この五年間学生たちに『たけくらべ』ばかりを教えてきた。そして遂には山場の（十二）章を暗記させた。日本語の構文と音の美しさを彼等の体の中に植えつけるといういささか強引な意図があったからである。結果は期待以上に成功した。学生たちは『たけくらべ』から一葉文学にのめり込んでいった。

そのうちに意外な事実を発見した。私自身が声を出して学生たちの前で朗読していくうちに、日本の標準語（共通語）の原点のように考えてきた一葉のことばが、実は甲州方言を色濃く残していることに気付いたからである。「おや、これは甲州弁ではないか」と思ったのだ。そう思って疑っていくうちに次々に方言が見つかるのだ。お断わりしておくが、私は言語学者ではない。あえていうならば朗読家である。耳と口から日本語の響きを感じている。生まれは昔の東京小石川、一葉が通った「萩之舎はぎのや」は私の町内だ。大学までここに住んでNHKアナウンサーとなり、現在は甲府市に住む山梨県人である。その私からみて一葉のことばは甲州方言を色濃く受けついで東京の山手やまのてことば、いやむしろ下町に近い山手ことばなのではあるまいかと思わしめたのだ。

そこで私は山梨、特に東郡ひがしおろと言われる一葉の両親の出身地塩山周辺えんざんに住む友人たちの協力を得て、『たけくらべ』『にぎりえ』『十三夜』『この子』の中から次の様に甲州方言を摘出してみた。

だから、三枚裏にして襦珍じゆちんの鼻緒はなごというのを履くよ、似合うだろうかと言えは、美登利はくすくす笑いながら、背の低い人が角袖外套かくそでがわいに雪駄ゆきだばき、まあどんなにかおかしかりう、目薬めやくの瓶びんが歩くようであろうと誹むすに、馬鹿ばかを言っているらあ、それまでには已らだつて大きくなるさ、こんな小ちひっぽけではないないと威張いぢやうるに、それではまだいつの事だか知れはしない、天井てんじやうの鼠ねずみがあれ御覽ごらん、と指さをさすに、筆ふでやの女房にようばうを始めとして座ざにある者みな笑いころげぬ。

正太は一人真面目まじめになりて、例の目の玉たまぐるぐるとさせながら、美登利さんは冗談じやうだんにしているのだね、誰だつて大人おとなにならぬ者はないに、已らの言うが何故なにおかしかりう、奇麗きれいな嫁よめさんを貰もらつて連れて歩くようになるのだがなあ、已らは何でも奇麗きれいのが好きだから、煎餅せんべいやお福おふくのような痘痕あせちやづらや、薪かきやお出額でがくのようなが万まん一來いちらいようなら、直じきさま追い出して家いへへは入れて遣やらないや、已らあ痘痕あせちやと湿しつつかきは大嫌おほいといと力ちからを入れるに、主人あにぢの女によは吹き出して、それでも正さんよく私が店みせへ来て下さるの、伯母おばあさんの痘痕あせちやは見えぬかえと笑わらうに、

それでもお前は年寄りだもの、己らの言うのは嫁さんの事さ、年寄りは何でも  
いいとあるに、それは大失敗だねと筆やの女房おもしろづくに御機嫌を取りぬ。

町内で顔の好いのは花屋のお六さんに、水菓子やの喜いさん、それよりも、  
それよりもずんと好いはお前の隣に据ってお出でなさるのなれど、正太さんは  
まあ誰にしようと極めてあるえ、お六さんの眼つきか、喜いさんの清元か、ま  
あどれをえ、と問われて、正太顔を赤くして、何だお六づらや、喜い公、どこ  
がいい者かと釣りらんぷの下を少し居退きて、壁際の方へと尻込みをすれば、そ  
れでは美登利さんがいいのであろう、そう極めてござんすのと、凶星をさされ  
て、そんな事を知る者か、何だそんな事、とくるり後を向いて壁の腰ばりを指  
でたたきながら、廻れ廻れ水車を小音に唱い出す、美登利は衆人の細螺を集め  
て、さあもう一度はじめからと、これは顔をも赤らめざりき。

(十二)

信如がいつも田町へ通う時、通らでも事はすめども言わば近道の土手手前に、

童心社刊『樋口一葉・たけくらべ』より。——線部分は甲州方言（山梨方言）

こうして抽出した甲州方言をまとめると次の様になる。

『たけくらべ』

(一)

坊ぼく 男の子。甲府盆地東部〔二葉の両親の出生地塩山えんざん〕などでは今でも「坊」と呼んでいる

(二)

学問が出来おる。「し」おる」は甲州の男ことば

いくら金があるとって。「し」おる」とって」といっての意味

威張りおる。前述 男ことば

力のないは忘れて「の」抜きは山梨方言の特色である

(三)

おろかの事「な」というべき処を「の」にする場合が多いのも山梨方言の特色

せがむに「し」(する)に」の表現は一葉が最も多用している山梨方言の特徴

(四)

見なれぬ粉粧いでたちとおもうに。 前述

早くと言うに。 前述

番をたのむとあるに。 前述

あの飛びようが可笑しい。山梨方言では「飛ぶ」ことも「走る」ことも同じ「飛ぶ」で区別がない。運動会は「駆かけっ

こ」ではなくて「飛びっくら」である

(五)

幅の狭いを「の」抜き 前述

いざと言うに「し(する)に」 前述

手が出しかねたに「の」抜きと「し(する)に」の複合

幸いの巡査さまに家まで見ていたかば我々も安心 幸いにの意味。こんな風に「の」が多用される

小さくなるに「し(する)に」 前述

叱らるるようの事 「な」と共通語ではいふべき形容動詞型語尾の「な」を「の」というのが山梨方言の特色の一つ

(六八)

学校をいやがるは「の」抜き 前述

種々がある 「な」抜き

財産家というに「し(する)に」 前述

種々の事 「な」を「の」と表現する例 前述

我が弱いを「の」抜き 前述

いやのような顔 「な」を「の」と表現 前述

(七)

礼を言ったは可笑しいではないか 「の」抜き 前述

なるだけ 「なるだけ」「なるだけ」と両方使う 一般に山梨方言は清音・濁音にこだわらないが濁音が多い

あるに「し(する)に」 前述

(九)

異なるもの 妙なもの。「異なることいっちょよし」 妙なことを言うなという意味で、現代でも盛んに使っている

月の幾何は 月のうちの何日かは。例「あの会合は幾何だったか」というように使っている

耳をかたぶける かたむける バ・マ行(B・M)交替語。「かたぶける」の方が古形。前述の「なるだけ」の清濁問題に

も通じる

聞くに「〜(する)に」 前述

(十)

背負いたるようの思い 形容動詞型語尾の「な」が「の」になる 前述

恥ずかしう思ふかして「思ふかして」はどっちつかずの気持ちを表わす方言

腹を立つか知らないけれど 甲州方言は「腹を立つか知らんが」というが、これは甲州方言的一葉独自の表現だろうか

大舟に乗ったようだに「〜なの」の方言

いやだとしても といっても。「一葉の両親の出生地、甲府盆地東部、塩山方面の方言」 前述の「とって」及び後述の

類似語参照  
出かけるに「〜(する)に」 前述

車の飛ぶ事 走ること。 前述

煙り 前述(かたぶける) 清音、濁音の区別を明確に持たない甲府盆地東部の方言

問うに「〜(する)に」 前述

遊ぶほどに 前述

嬉しがるに 前述

(十一)

顔を出すに 前述

いやな小僧とってはない 前述の「いやだとしても」と同様にこの表現は甲府盆地東部、塩山方面で使っている。いやな小僧たららないの意味。「行ったかい」という時に「行っとうかい」という言い方をする。「いやだとしても」も「小僧とってはない」も、この「行っとうかい」と何か共通性を感じる

誹すに「〜(する)に」 前述

威張るに 前述

指をさすに 前述

大人にならぬ者はないに「の」抜きと「〜(する)」に「の」の複合

己らの言うが何故おかしからう 言うのが「の」抜き

奇麗のが好き 「な」抜きもまた「の」抜きと同じ感覚

——のようなが ——のようなのが。「の」抜き 前述

力を入れるに「〜(する)」に 前述

笑うに 前述

何でもいとあるに 前述

居退きて 動いて。山梨方言では「動く」といわず「いのく」という 特に高齢者に多い

(十二)

意地わるの嵐 「な」の代りに「の」を多用する例

手を延ばすに「〜(する)」に 前述

どのような大事 前述

(十三)

立てかけて置けばよいに よいのに「の」抜き 前述

呼び立てられるに「〜(する)」に 前述

どうでも どうしても。他に「どうで」などを多用する

さまざまの思案 「な」というべき処を「の」と使う

つくるに「〜(する)」に 前述

飛石を伝いゆくに 前述

取りあぐる。「あげる」「あぐる」を共に使う

いうに「　(する)に」 前述

下駄を脱ぐに 前述

困り切るに 前述

(十四)

今まの先 他に「いまさっき」「今の間」を使うこともある

駆け込むに「　(する)に」 前述

(十五)

言うに 前述

過ぎるに 前述

聞くより。聞くとすぐにを「　より」と表現する

急に「　(する)に」 前述

怪しがるに 前述

門をくぐり入るに 前述

上がるを「の」抜き 前述

見るより。見るなり、見るとすぐに 前述

言うに「　(する)に」 前述

問うを「の」抜き 前述

どうでも どうしても 前述

帰りたいに「　(する)に」 前述

煙けぶり 前述

言う筈はないに「の」抜き 前述



(十一)

飛び込み来<sup>き</sup>しなるに「〜(する)に」 前述

言うに 前述

話していたを「の」抜き 前述

お前みたようのが お前みたい<sup>な</sup>よう<sup>な</sup>のが 「いな」「な」を共に抜いて短絡化している 短絡は甲州方言の大きな特色である

やりたかったに「〜(する)に」 前述

生まれかわりしようの身の振舞<sup>ふるまい</sup> 「な」の代りに「の」を多用する 前述

『ごりえ』

(一)

何<sup>な</sup>たら事<sup>こと</sup>だ 何<sup>なに</sup>という事<sup>こと</sup>だ。普通は「何<sup>な</sup>たら<sup>ら</sup>こ<sup>こ</sup>ん<sup>ん</sup>だ<sup>だ</sup>」と使う

どう<sup>どう</sup>で どう<sup>どう</sup>せ。何<sup>なに</sup>れにせよ。

何<sup>なに</sup>うでもなるに 何<sup>なに</sup>うでもなる<sup>の</sup>に。「の」抜きと「〜(する)に」の複合

どう<sup>どう</sup>で 前述

(二)

何<sup>なに</sup>うでも どう<sup>どう</sup>しても。

聞<sup>き</sup>くに「〜(する)に」 前述

波<sup>なみ</sup>々とつぐに 前述

い<sup>い</sup>ふに 前述

お酌<sup>しやく</sup>をせぬとい<sup>い</sup>ふ<sup>の</sup>が<sup>が</sup>大<sup>おほ</sup>詰<sup>まつ</sup>め<sup>の</sup>極<sup>きま</sup>り い<sup>い</sup>ふ<sup>の</sup>が。「の」抜き

何うだとあるに「〜(する)に」 前述

聞かれるに 前述

何うで どうせ。何れにせよ。 前述

様子のみゆるに「〜(する)に」 前述

どうで 前述

来るに「〜(する)に」 前述

夫れだどつて。それだからといつての意味。短絡化の例 前述

たたくに「〜(する)に」 前述

下りに 前述

(三)

思ふかして。どっつかずの不確かな表現 前述

いうに「〜(する)に」 前述

告口するに 前述

ちつと。ちよつと。甲州方言では「ちいと」「ちつと頂戴」などという

いふに 前述

といふに 前述

といふに 前述

眉を寄せるに 前述

ゆくを「の」抜き 前述

といふに 前述

茫然として居るに 前述

笑って居るに 前述

といふに 前述

寝るからとても 寝るとすぐに。

するに 前述

陰気のはなし 「な」といふべきを「の」という 前述

く・れ・ろ 「くれ」の男ことば 「ろ」は強調

思ったに 「く(する)に」 前述

といふに 前述

出るに 前述

呼ぶに 前述

(四)

日が暮れたに 前後

呼立つるに 前述

いふに 前述

いふに 前述

気をつくるに 気をつける。と「く(する)に」の複合

箸をとるに 前述

盆・庭の端についたが身の詰り ついたのが 「の」抜き 前述

世を渡るに 前述

あれを思ふに 前述

だまされたは 「の」抜き 前述

いふに「」（する）に」 前述

あるに 前述

胸の中かき廻されるやうなるに 前述

(五)

きくに 前述

居るに 前述

呼ぶに 前述

包むに 前述

立つに 前述

騒ぐに 前述

来るに 前述

何うで とうせ。何れにせよ。

情ないとも。 といつてももの意味。「」（する）とって」に「も」が付いた形とみるべきか

(六)

笑ふに 前述

せめられるに 前述

中座をしたるに 前述

言ふてやるに 前述

といふに 前述

笑って居るに 前述

ほろりとするに 前述

工夫をこらすに 前述

父母ちちははの心をも知れてあるに 前述

声こゑのもれるに 前述

とあるに 前述

何どうで どうせ 何いづれにせよ 前述

といふに 前述

支度するを 「の」抜き 前述

何どうでも どうしても。「どうで」「どうでも」と「何どう」を多用する方言の類似形

(七)

参詣したる事ことなど などの意味。

いふに 前述

なげくに 前述

情なき思ひもするを 「の」抜き 前述

思ふに 前述

駆け込むかむに 前述

何なんたら 何なんという。

いふに 前述

知人しにん 知人のこと。

くれるに 前述

とっとここに取とって 元來定植する苗を一時的にまとめて植えて置いて定植し直す予定の床とこ。そこから「それをネネタタにして」

の意味になる。現代流に言えば担保にしての意味の甲州方言

泣くに 前述

いふに 前述

いふに 前述

(八)

思はなんだが。思はなかったが。「くせなんだが」という言ひ方の方言形式と同じ

『十三夜』

(上)

育てるに「く(する)に」 前述

小遣こづかひも差さしあげられるに 前述

笑ふに 前述

あつけない御挨拶よりほか出来まい のほかの意。「よりほかに」の「に」も抜いてある

お出いででない おいでではない。「は」抜きであると同時に、「お出いででた」「お出いででて下さい」は丁寧語の方言

十五夜に(団子を)あげなんだ あげない。「十五夜にあげなんだから十三夜にはやらんよ」などと言う

出来なんだに 出来なかったから。「だ」の過去形に「く(する)に」が加わったものか

こしらいた こしらえた

気に入ったを「の」抜き 前述

人に侮あなどられぬやうの心懸こころがけ ような心懸こころがけ。 前述

私だとして孫なり子なりの顔の見たみたいは「の」抜き 前述

言ひ出すに 前述

入れるに 前述

まだ私の手より外ほか 私の手にししか。「私よりほか出来ない」などという  
今日はどうでも どうしても。 前述

問かゝるに 前述

悪るいを「の」抜き 前述

日の影といふを見た事が御座りませぬ いふものをの短絡

楽しくないは「の」抜き 前述

何うでも 前述

夫れを取とこに出でてゆけと言はれる 理由に。口実に。 前述

貰ふに 前述

出入りをせぬといふも 「の」抜き 前述

百まんだら 百万遍べんも。「百まんだら並べたって駄目は駄目だよ」

居るに「し（する）」に 前述

太郎を仕立しだるにも 教育して行くにも。「あの家は子どもを大学まで仕立てただヨ」

事件でもあつてか あつたのか。「し（して）」か」で疑問形もつくる

良人は一昨日おとといより家うちへとは帰かえられませぬ 家へなんかにはお帰りになりませぬ。

叱ちかるではない 叱ちかるのではない。「の」抜き 前述

機嫌きげんの好いい様やうにとゝのへて行くが妻つまの役やく 行くのが…「の」抜き 前述

言はれぬに「し（する）」に 前述

離縁りえんを取とつて出でたが宜よいか 出でたのは宜よいとして

親おやも察さしる弟あにも察さしる 察さする。「どうしっか」「どうするでえ」などと方言を使う。「す」が「し」になる場合が多い。

(下)

何うでも どうしても。 前述

唯た今の先まで ついさっきまで。 前述

小児のも出来てか 小児を「ちっさい」と呼ぶ。 出来てか 「( )して」か」で疑問文をつくる 前述

というに 前述

何のやうの世渡りをして 「な」が「の」に転ず 前述

氣に向いた時は 氣が向いた時は。「が」を「に」という例

烟(けぶり) 前述

下を向くに 前述

寄りつかぬやうに成ったを 「の」抜き 前述

極めて置いたを 前述

成ったは 前述

力なささうの塗り下駄のおと 「な」を「の」という 前述

## 『いの子』

誇り顔に申ことのおかしいを おかしいのを 「の」抜きことば 前述

厭やな事の、情ない身と いやなことばかりで情ない身の上と 甲州方言に「やだことの、いいだことの」 何んの彼の

なんだかんだといって という表現の仕方がある

私の生意氣の心から 「な」を「の」という 前述

負けるぎらひ 負けずぎらい。

言葉返し 口ごたえ。「お母さんは何にを云ても己決して——をしたことはないが／塩原多助一代記 円朝」(三省



堂・大辞林) 古い日本語がそのまま使われている方言

言葉返しは遂つひひしか爲しませんかったけれど 返答は遂つひにしななかったがの意味で「〜せなんだ」という形式の甲州方言が見え隠れする

馴なれるといふは好い事の悪いことでもなれるといふのは好いことのように、実は悪いこととして、甲州方言は何重にも極めて短絡に表現するのが大きな特色である

こぐらかる こんがらかる。古い日本語を使う方言  
出来できませんかった 出来できませんでした。

現げんに 実際じっしに。「現げんにあいつは〜だから」の用法は今日も盛んに使われている男ことば

何どのやうの 「な」を「の」という例 前述

其そのやうの 前述

外あへいらっしやるに 「〜(する)に」 前述

苦くるしいの、厭いややのと言ふ時に限って 「の」を並列して否定的な意味に使う 前述

いろいろの人 「な」を「の」という例 前述

極きまりかゝつたに 「〜(する・した)に」 前述

歯はが痛いいたいの頭痛づうとうのと言って 「の」を並列して否定的に使う 前述

私わたしは私の考かんがへ通りとおりな事ことして 「の」を「な」という例。 前述

私わたしがいくらか物の解わかるやうに成なったも なったのも 「の」抜き 前述

口返くちへん答とうばかりして役にたたずで有あった御飯ごはんたきの勝かつも役やくにはたたなかつた。「に」が入ったことで一見、東京のことば

坊ぼのように聞きこえるが、甲州方言の「役立やくたたず」のことばが色濃いろこく感じかんじられる

坊ぼは 甲州方言の中でも峡東地区の極きく限かられた地域ちいきのことば 前述

## 『この子』の未定稿から

お嫁にいらした。「つ」が入っている

似やあしない 似合いはしない これも短絡型の例

二歳になる愛雄といふを可愛がるさま 「の」抜き 前述

あの奥方の藤堂さんたら。といったら。現在も使っている甲州方言

大層なは、残りなく口には言ひ盡されませぬ。大層なことといったらの意味。「——なは——せぬ」といった型式で否定的な意味に使う場合が多い

厭な事いやの、情ない身だと 厭な事いやの多い中で暮らす、情ない身だとの意味に見える。随分と短絡して表現している。短絡もここまでくれば相当なものだ

仰言おつしやつて下さるに 「〜(する)に」 前述

以上、『たけくらべ』『にぎりえ』『十二夜』『この子』と、一葉の作品の中に見られる甲州方言を垣間見たつもりである。この他にも疑わしいものも多いが、それは取り上げなかった。また山梨には「いとど」など、それこそ中古の言葉をいまでも使っている老人もいる。これを方言として見るべきか。あるいは古語の残存と見るべきか。一葉文学の中でもその辺りは微妙である。

以上を分類してみると、頻度の比較的多いものから

↑——(する)に 誹おとすに、威張いばるに、指をさすに、ないに、入れるに、笑うに、あるに、などと甲州独特の接続法として用いられる「〜(する)に」という接続法を仮に一葉から取り上げてしまったとしたら、一葉は文章が書けなくなってしまうだろうとさえ思われる。それほどこの形式の使用頻度が高いのだ。甲州人がこれを発音する時は「〜(する)に。」と、ことさら「に」を延ばして話す。「冒頭の甲州方言摘出例参照」

△「の」抜き 力のない△は忘れて いやがる△は 礼をいった△は 大人にならぬ者はない△に 〴〵のような△が

というように△の位置に入るべき「の」が短絡している。また頻度は少いが「な」抜きことばもある。さらには お出でた お出でない のように お出でになつた お出でにならない と三字も省略している例さえある。再三申し上げているように甲州方言は消略が大きな特色である。

△「な」を「の」といい、逆に共通語で「の」というところを「な」という。おろかのこと 叱られるような事はせぬ いやのよの顔 どのような大事。その反対に 奇麗のが好き と奇麗なのが好きというべきところを「な」まで消略している。

△「に」を「の」という。幸さいわいの巡査まわしさまに家まで見て頂かば我々も安心。

△——とって(も) あるとって いやだとしても いやな小僧とってはなない。これは極めて地域的な甲府盆地東部の方言

△——しおる これも極めて地域的な男ことば。学問が出来おる 威張りおる など

△——より 聞くより 見るより 「し(する)なり直ぐに」の意味で使う場合がある

△——よりほか あっけないご挨拶よりほか出来ぬ 私の手より外ほか。「ししか」の意味

△——だに 大舟に乗ったようだに。くなののにの方言

△——の——の だの——だの。何んだ彼だのの意。苦しいの厭いややのと

一葉の使っている方言はこのように成熟語より、接続詞や助詞など文章を構成していく部分に甲州方言が色濃く残っている。成熟語は一葉自身、それが標準語(いまの共通語)ではないことを知っていて、意識的に使わなかったのではないだろうか。その証拠に成熟語は 坊(男の子)月の幾い何かは(月の幾日かは)小兒(ちっさいの) 十分間に車の飛ぶ事この通りのみにて七十五輛と教えしも(走ること) とっこに取とって(それを証拠にして) などと極めて数が少ないのである。

それともう一つ。

一葉の両親の育った甲府盆地東部は、清音と濁音に明確な区別がないようである。「煙り」は「けむり」でもあり「け

ぶり」でもある。どちらかと言えば「けぶり」の方が使われている。これなども甲州方言の特色の一つであろう。

おしまいに——次のようなことが類推される。

方言といった場合、普通は名詞・形容詞・動詞などのいわゆる成熟語が注目されるが、むしろそれらとともに文章を構成する形容動詞や副詞、助詞や接続詞などに独特の言いまわしが残っている。それもそのはずで、幼い時分から培われた文章形成法はその人の生涯を支配するからだ。一葉自身、へ——（する）にを連発することによって物語の筋を作っていくのがいい例である。この方法は容易には変わらない。東京下町のちゃきちゃきの言葉とばかり思っていた一葉のことばが、実は両親の郷里山梨県の東部方面（塩山方面）の方言を色濃く残していることは、正直に言って私自身が驚いた次第である。

面白いことに、その方言の知識を今度は逆に存分に使ったのが『十三夜』である。ご承知のように『十三夜』は夫の冷たい仕打ちに一時は実家に戻った主人公の阿関が、父親の諫めで再び嫁ぎ先に戻って行く。その帰途に乗った車夫が初恋の男であったという不思議な出会いを書いている。(上)の二節から成るこの物語は、(上)が実家の両親と自分。(下)に初恋の録之助と自分が登場する。この(上)の実家の両親のことばが思いっきり甲州方言なのである。つまり一葉は、はつきりとこの二人を甲州人として描ききっているのである。明治になって地方から出てきた一つの家族の象徴として、それはそのまま一葉の両親を写しているのだろう。従って(上)は(下)にくらべて三倍も甲州方言の出てくる頻度が高い。

ところで明治初期には出身県別の人間集団が新しい首都東京に点在していたものと思われる。一葉の日記にも「親類めきたるもの」が足繁く通ってきた様子を伝えている。在京の成功者を頼って芋づる式に東京へ出てくるのだが、それらの人たちが東京の中に県人村といったものを作っていくのだ。一度も山梨県へ行ったことのない一葉のことばに、これだけ多くの「お国訛」が伝えられていることが何よりの証明だろう。両親のことばと県人村で喋べる言葉が、東京の昔からのことばと交錯して一葉の耳に入っていたのであろう。外にあっては東京ことば、県人村では「お国訛」で思いつきり喋べったに違いない。これは何も山梨県人に限ったことではない。静岡県も長野県も東北の人たちも同じような道を辿ったであろう。そして明治から数えて今日まで百三十年余り、世代にして四世代ともなれば、各地の「お国訛」も

混合して今日の東京ことばが成立したのではなからうか。それはそのまま各県の粹組を越えた混合民族(?)としての東京人の成立と符合する。「一葉文学に見る甲州方言」から私はそんな風に考えている。

〔参考文献〕

- ・岩崎ちひろ編『樋口一葉・たけくらべ』（童心社）
- ・『樋口一葉全集』（筑摩書房・49・3・20初版）